大学生の同性友人関係における状況に応じた切替
── 社会的スキルとしての効果性と教育上の課題 ──

大　谷　宗　啓*

Situational Changeovers in University Students' Relations with Congeneric Friends : Effectiveness as Social Skills and Educational Problems.

Munehiro OHTANI*

Abstract

This article examined the effectiveness as social skills of situational changeovers (Ohtani, 2007). University students (n=386) completed a questionnaire that contained scales of changeover behaviour, information process, satisfaction of friendship, and interpersonal orientation. The results of cluster analysis and analysis of variance showed the person of high situational changeover with high information process had high satisfaction and high affiliation motive but such persons were only 26.4 percent of the whole. The educational problems which these results suggested were discussed.

Key Words: situational changeovers, friendships, social information processing, self, adolescence

問題と目的

現代青年は対人関係が希薄化し，自己開示や傷つき・傷つけられることを避け表面的で円滑な関係を求める傾向が高まっていると指摘されてきた[1)]。こうした希薄化論を基に近年の友人関係研究は展開し知見を積み上げてきたが，希薄化という観点のみでは友人関係の実態を充分捉えられないことも明らかとなってきている[2),3)]。この問題に関しては社会学者を中心に，関係が多様化・流動化した現代社会では状況に応じて複数の相手や複数の自己を切り替える傾向が強まるのであり，それを関係の希薄さと混同・一括して捉えてしまっている可能性が指摘されてきた[4)]。そこでは，そうした行動傾向は，様々な相手との関係を維持するために多様なコミュニケーションを使い分ける高度な社会的スキルとして評価されており，また，10代・20代の青年の７割に見られる一般的な行動傾向であると報告されている[5)]。

＊大阪電気通信大学非常勤講師 schatten@aqua.ocn.ne.jp

大谷（2007）[6]は，友人関係において状況に応じて関係対象や自己のあり方を切り替えることを「状況に応じた切替」と定義し，希薄化論に基く既存観点に加えて友人関係を捉え直すことを試みた。そこでは，関係の希薄さと状況に応じた切替とは弁別可能であること，弁別することによって心理的ストレス反応への予測力が向上することを実証し，状況に応じた切替への注目が，青年期の友人関係を捉え直し，彼らへの支援・指導を再考するために有益な視点であることを明らかにした。しかし，高度なスキルという岩田（2006）[5]の評価を明確に支持する結果は確認されず[6),7]，特に自己のあり方を切り替える「自己切替」については，むしろ不適応状態との関連が見い出されている[8),9]。これらの結果を見る限りでは，状況に応じた切替が社会的スキルとして効果的に機能するとは考え難い。

それでは，状況に応じた切替は社会的スキルとして効果的に機能しないと結論できるであろうか。社会的スキル研究においては近年，臨床場面で問題となる「スキルは獲得したものの，適切に行使できない」現象に説明と対策を与える概念として，自らの社会的スキルや対人関係状況に対するメタ認知を働かせ，スキルの適切な選択的行使・非行使を決定するメタ・ソーシャルスキルの概念が提案されている[10]。例えばある行動が社会的スキルとして効果的に機能していない場合，それが当該の行動の不適切さの反映であるのか，当該の行動の運用の不適切さの反映であるのかを区分して捉えれば，臨床的な支援可能性を高めることができる。このメタ・ソーシャルスキル概念を参考に本研究では，状況に応じた切替を，切り替える行動そのものである「切替行動」と，切替行動の適切な行使・非行使を決定するための情報処理過程に関わる「切替メタ・スキル」とに区分して捉え直すことによって，切替行動が社会的スキルとして効果的に機能する可能性，およびその必要条件を検討する。

それでは，切替行動が社会的スキルとして効果的に機能するために必要な条件とはどのようなものであろうか。状況に応じた切替の中でも不適応状態との関連が見い出されている自己切替に注目し，類似概念の研究の蓄積を紐解けば，当該の対人行動，すなわち状況に応じて自己のあり方を切り替えることが社会生活上適応的である可能性は，Lifton（1967）[11]が古くから指摘してきたものの，実証的研究においては概して不適応状態との関連が示されてきたことが分かる[12),13),14]。そうした中，セルフ・モニタリング[15]に限っては，社会的孤独感の低さ等，適応状態との関連[16]が報告されてきた。セルフ・モニタリングと他の諸概念との差異に注目すると，セルフ・モニタリングには他者を喜ばせようという目標の明確さが含まれている点[17]と，状況間可変性，即ち「状況→人」の機序のみならず，状況の選択，改変という「人→状況」の機序をも併せ持つ力動的相互作用として捉えられている点[18]が特徴として挙げられる。状況アイデンティティ理論[19]や自己システム研究[20]が同様の特徴を前提していること，また，偽りの自己行動と精神的健康との関連が行動の動機により異なること[21]も考慮すると，目標の明確化および力動的相互作用の有無が，切替行動が社会的スキルとして効果的に機能するための必要条件であることが予測される。

メタ・ソーシャルスキル概念の理論背景でもある社会的情報処理モデル改訂版[22]は，子どもの社会的適応に関する情報処理を，符号化，解釈，目標の明確化，反応検索と構築，反応決定，行動実行の 6 ステップの循環過程としてモデル化している。このモデルには目標の明確化が組み込まれており，また，モデル全体を循環過程とすることによって力動的相互作用も組み込まれてい

る。しかしながら，青年期の友人関係においては自他双方の視点から要求の調整が行なわれること[23]を踏まえれば，対人相互作用相手の側の目標や反応のレパートリーについての情報処理過程もモデルに追加する必要があると考えられる。加えて，友人関係という継続的な関係では，当該の相互作用場面のみならず過去・未来の相互作用に関する情報処理も必要と考えられる。そこで本研究では，過去・未来に亙る展望を踏まえて現在の対人関係状況を判断しているかを問う「展望」，自身および相互作用相手となり得る各友人（以下「自他」）の目標を明確に認知しているかを問う「自他の目標の明確化」，自他が取り得る反応のレパートリー，即ち相互作用において利用可能な資源を把握しているかを問う「自他の資源の把握」（反応検索と構築に相当），反応実行が自他に及ぼす影響を考慮した上で反応を選択しているかを問う「反応決定」，以上 4 つの下位概念を以って切替メタ・スキルを測定する。

なお，先に述べた通り，社会的情報処理モデル改訂版では他に符号化と解釈のステップも設定されているが，目標の明確化と自他の資源の把握のステップを自他双方について問う本研究では重複が生じるため整理統合した。また同じく社会的情報処理モデル改訂版におけるデータベースについては，ゲシュタルト性を持つ中心特性的なものであり，各処理ステップとの関係については多大な検証が必要であるとの指摘が存在しており**，石井（2007）[27]でも弁別に失敗している。本研究ではデータベースの働きは全過程に密接不可分に含まれるものと位置付けて，独立した項は設定しない。

切替行動については大谷（2007）[6]と同じく，状況に応じて関係対象を切り替える「対象切替」と，自己のあり方を切り替える「自己切替」の 2 下位概念を設定して測定した。これは，対象切替と自己切替とでは適応指標との関連の様相が異なっており[8),28]，質的差異の存在が予測されているためである。

社会的スキルとしての効果性を判断する外的基準には，自身の関係満足と相手の関係満足の推定値を用いた。ところで，人間関係についての悩みがない青年の中には，その理由として関係の良好さではなく人間関係観を挙げる者が相当数存在している[29]。したがって関係満足のみを外的基準とした場合，関係の良好さに由来する満足と関与の低さに由来する満足とが混交して解釈困難となることが懸念される。そこで本研究では，人間関係をどれくらい重視しているかについても併せて問うた。

なお，相手の属性によって共にする活動や自己のあり方は異なることが知られている[30),31]。本研究ではそのような属性情報に基く区分ではなく，対人関係状況という動的な手掛かりによる切替を捉えるために，同性間の友人関係に限定して問うた。調査対象者は，情報処理過程の自己報告を求めることを考慮し，充分な内省能力を期待できる大学生とした。

** 大坊（2008）[24]による指摘。厳密には社会的スキル生起過程モデル改訂版[25]における社会的スキーマについての指摘であるが，読み替え可能である。詳しくは相川・佐藤正・佐藤容・高山（1993）[26]も参照されたい。

方　法

調査の概要

2009年１月下旬，近畿地方の教員養成系大学の学生412名を対象に，講義終了後の教室にて無記名式の質問紙調査を実施した。回答所要時間は約15分であった。研究協力への同意が得られ，且つ回答に不備の無い386名（男性146名，女性239名，不明１名，平均年齢20.06歳，*SD*=1.51）を分析対象とした。

質問紙の内容

関係満足についての設問　初めに「あなたが日頃，いっしょに行動したり，電話やメールで個人的な話をしたりする同性の友人を５人思い浮かべてください。」と教示し，想起した友人にＡ～Ｅの記号を当てさせた***。その後，以下の小問への回答を求めた。

⑴自身の関係満足：「あなたは友人としてのＡさんに，どれくらい満足していますか。」と尋ね，「５．満足している」，「４．どちらかというと満足している」，「３．どちらともいえない」，「２．どちらかというと不満だ」，「１．不満だ」の５件法で回答を求めた。

⑵相手の関係満足の推定：「Ａさんは友人としてのあなたに，どれくらい満足しているだろうと思いますか。」と尋ね，「５．満足しているだろう」，「４．どちらかというと満足しているだろう」，「３．どちらともいえない」，「２．どちらかというと不満だろう」，「１．不満だろう」の５件法で回答を求めた。

上記の小問⑴～⑵を１ユニットとし，設問文中の「Ａさん」の部分をＢ，Ｃ，Ｄ，Ｅと順次入れ替えたユニット毎に回答を求めた。

状況に応じた切替についての設問　石井（2007）[27]，大谷（2007）[6]を参考に，切替メタ・スキル16項目，対象切替２項目，自己切替２項目の計20項目を作成し，青年心理学を専門とする研究者１名と協議・修正したものをシャッフルして配列した（項目は後掲**Table 1～3**参照）。「以下の項目は，あなたにどれくらい当てはまりますか。」と尋ね，「５．あてはまる」，「４．どちらかというとあてはまる」，「３．どちらともいえない」，「２．どちらかというとあてはまらない」，「１．あてはまらない」の５件法で回答を求めた。

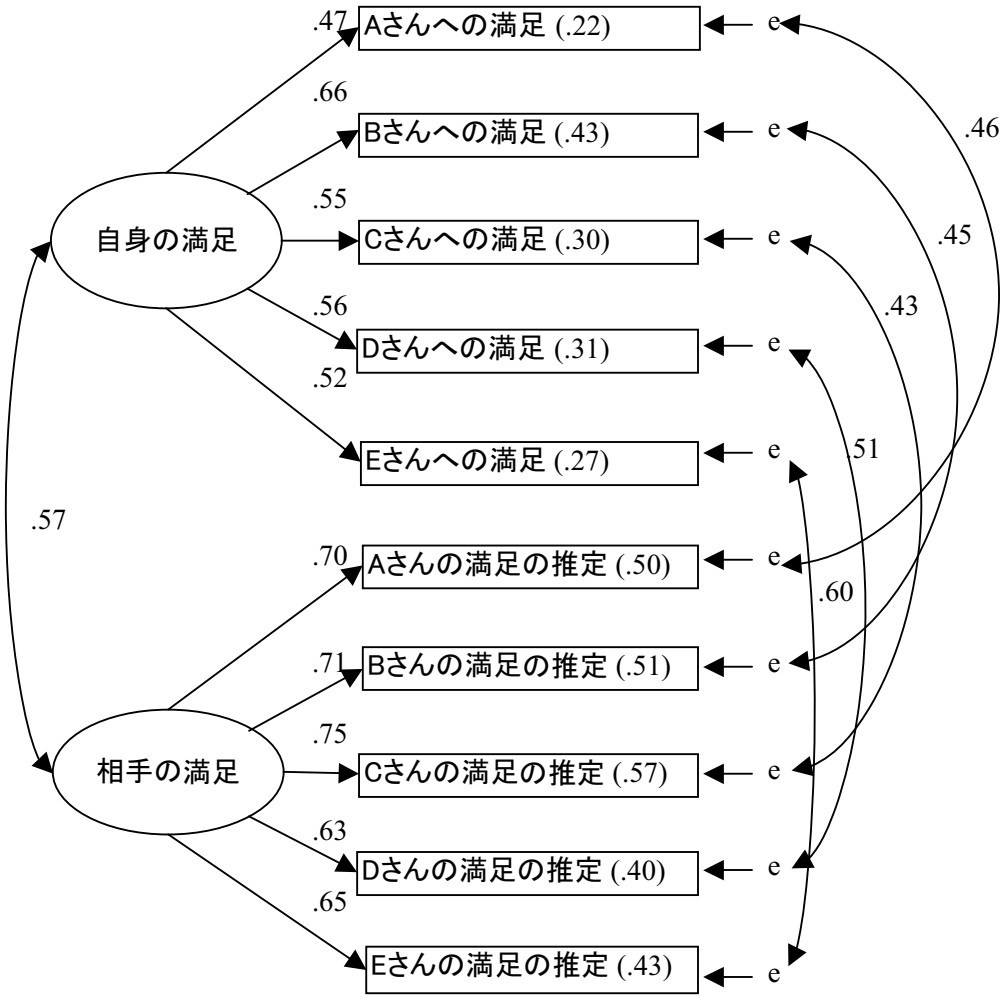
関係志向性についての設問　IOS-Ｖ[33]の人間関係志向性因子９項目を使用した（項目は後掲**Table 4**参照）。リード文，および，評定のワーディングは，前段の設問と同じものを用いた。

*** 回答が曖昧なものとならないように実際の友人を明確に想起しての回答を求めた。吉山（2002）[32]での平均想起人数が8.96人（*SD*=3.58）であったことを踏まえ，回答者が無理なく想起できる人数として５人に限定した。なお，想起相手の明確化を促すため，知り合った時期，居住地の遠近，共有集団についても尋ねたが，本稿での分析には用いない。

結　果

各指標の得点化手続き

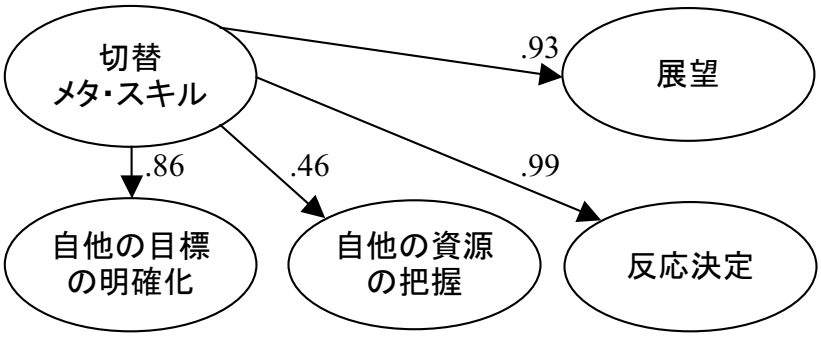
関係満足の指標　複数想起した相互作用相手について，個別性を無視して回答を合計することは適切ではない[34]。そこで本研究では，同じ友人に関する回答の誤差間に共変関係を設定した上で，各回答の背後に潜在変数「自身の満足」と「相手の満足」とを設定した。また，自他の満足が独立であるとは考え難いため，因子間相関を設定した。モデルとデータとの適合度が許容範囲内[35]であったため，このモデルを採用し（**Figure 1**），回帰法により算出した因子得点を以って，自身の満足，相手の満足の指標得点とした。



GFI=.98 AGFI=.96 CFI=.99 RMSEA=.04
図中の標準化パス係数，相関係数は全て0.1%水準で有意。括弧内は重決定係数。

Figure 1　関係満足の因子構造（n＝386）

切替メタ・スキルの指標　下位概念設定にあたり参考とした社会的情報処理理論において，処理過程の各ステップは交絡する[36]。理論的に各ステップが循環関係にある以上，交絡することに意味があると考えられるため，下位尺度得点化は行なわず，各下位概念の背後に高次の潜在変数を置く構造方程式を仮定した****。モデルとデータとの適合度が許容範囲内であったため，このモデルを採用し（**Figure 2**，**Table 1**），回帰法により算出した因子得点を以って，切替メタ・スキルの指標得点とした。



GFI=.92 AGFI=.89 CFI=.87 RMSEA=.07
図中の標準化パス係数は全て0.1%水準で有意。観測変数はTable 1に示した。

Figure 2　切替メタ・スキルの因子構造（n＝386）

切替行動の指標　項目数を考慮し，評定平均ではなく主成分得点を用いた。**Table 2・3**に成分行列を示す。なお，因子分析ではなく主成分分析を採用したのは，各項目の肯定度に影響を与える潜在変数ではなく各項目の肯定度の集合が必要な指標であるからである。

関係志向性の指標　天井効果が強く推認された項目番号１番（「日頃から人間関係を大事にしている。」）を除く８項目でのα係数は.72であり，評定平均を用いるには内的整合性がやや低かった。確認のため１因子モデルを当てはめたところ，適合度はGFI=.87，AGFI=.77，CFI=.80，RMSEA=.16と許容範囲に至らず，パス係数のばらつき具合からも１次元構造と見なすのは適当ではなかった。そこで最尤法による探索的因子分析を行ない，挟み込み法[37]により因子数を推定した結果，２因子解が適当と判断された。Promax回転を施した後の因子パターンをTable 4に示す。項目内容から，第１因子は人間関係を煩わしく意義に乏しいことと感じる強度と解釈し「煩雑感」因子と名付け，第２因子は友好的な関係の成立を求める強度と解釈し「親和欲求」因子と名付けた。共に回帰法により算出した因子得点を以って，煩雑感，親和欲求の指標得点とした。

**** 項目番号01と02との間には比較的強い相関があり（r=.58，p<.001），他の14項目を制御しても比較的強い偏相関が見られた（r=.47，p<.001）。冒頭の２項目であり共に文頭語句が「友人」であることが回答に影響したものと考えられたため，当該２項目の誤差間に共変関係を設定した。

Table 1　切替メタ・スキルの観測変数と標準化パス係数（n=386, R=5-1）

	M	SD	標準化パス係数
展望			
10. コミュニケーションをとる時に，過去の経験を思い起こして参考にする。	3.87	.97	.60
20. コミュニケーションをとる時に，その場の結果だけではなく，相手との今後の関係についても考慮する。	3.77	1.06	.51
自他の目標の明確化			
01. 友人とどのようなやり取りをしたいのかを考える。	3.28	1.24	.41
11. その場のコミュニケーションに，自分が何を期待しているのかを考える。	3.45	1.09	.54
02. 友人が望んでいるやり取りはどんなものなのかを推察してみる。	3.55	1.13	.54
12. その場のコミュニケーションに，友人が何を期待しているのかを推察してみる。	3.77	1.01	.75
自他の資源の把握			
03. 自分の友人たちが，それぞれどんな個性を持っているのかを知っている。	4.25	.70	.63
13. 自分の友人たちの，それぞれの立場の違いについて知っている。	3.86	.83	.51
04. 自分がとる可能性のある態度や行動は，だいたい自覚している。	4.13	.75	.60
14. 実際にするかしないかは別にして，その場で自分がとることのできそうな行動について，いくつか思い浮かべる。	3.70	.98	.36
反応決定			
06. 実際に行動する前に，その行動が自分やコミュニケーション相手にもたらす結果を予測してみる。	3.66	1.05	.48
16. 実際に行動する前に，どのようにすれば，お互いに満足できるかを考える。	3.57	1.02	.58
07. 自分の態度や行動が，直接やり取りする友人とは別の友人にどう思われるかを予測してみる。	3.39	1.15	.47
17. 直接やり取りする友人だけではなく，その他の友人に与える印象についても考慮する。	3.46	1.11	.53
09. 予想外の反応が返ってきた時は，コミュニケーションのやり方を変えてみる。	3.73	.99	.59
19. 予想外の反応が返ってきた時は，なぜそうなったのかを考えてみる。	3.61	1.09	.50

表中の標準化パス係数は全て0.1%水準で有意。項目01・02の誤差間の相関係数はr=.47(p<.001)

Table 2　対象切替の主成分行列（n=386, R=5-1）

	C1	h^2	M	SD
18. 必要と判断すれば，どの友人とやり取りするかを切り替える。	.82	.67	3.68	1.03
15. 状況や望む結果などを考えて，その場で一番良いと思えるコミュニケーション相手を選ぼうとする。	.82	.67	3.89	0.94
固有値	1.34			

全2項目，α=.51。累積寄与率は67.00%

Table 3　自己切替の主成分行列（n=386, R=5-1）

	C1	h^2	M	SD
08. 必要と判断すれば，自分の態度や行動を切り替える。	.80	.64	4.00	0.92
05. 状況や望む結果などを考えて,その場で一番良いと思える態度や行動をできるだけとろうとする。	.80	.64	3.97	0.93
固有値	1.28			

全2項目，α=.44。累積寄与率は64.23%

Table 4　人間関係志向性尺度の因子パターン（最尤法，Promax回転，n=386，R=5-1）

	F1	F2	h^2	M	SD
F1: 煩雑感 (4項目，α=.87)					
2. 人から個人的な話をもちかけられるのは煩わしいものだ。	.85	-.04	.73	3.28	1.47
6. 他人の感情や気持ちを考えることは意味がない。	.85	.02	.73	3.27	1.73
4. 自分にとって人間関係は煩わしいものである。	.76	.06	.59	3.22	1.36
8. 仕事上の付き合いでは，個人的に親しくなることは重要ではない。	.71	-.01	.51	3.12	1.34
F2: 親和欲求 (4項目，α=.60)					
7. 出会った人とは，できるだけ親密になろうと努力する。	-.05	.77	.59	3.54	1.02
3. 人付き合いがよい方だと思う。	-.04	.49	.24	3.45	1.06
5. 同じゲームをやるなら，一人でできるものよりも相手がいてできるものの方がよい。	.14	.43	.21	3.62	1.17
9. 他人事でも，一喜一憂することが多い。	.04	.41	.17	3.61	1.14
因子寄与	2.59	1.18			

因子間相関	F1	F2
F1	—	.06
F2	.06	—

計8項目，α=.72。回転前の累積寄与率は47.12%

回答者のタイプ分け手続き

性差の確認　青年期の友人関係においては広く性差が認められる[38]。そこで，切替メタ・スキル，対象切替，自己切替の 3 得点（以下「切替 3 得点」）に基いて回答者をタイプ分けする前に，切替 3 得点について性差の有無を確認した。t検定の結果，切替 3 得点のいずれについても性差は有意ではなかった（切替メタ・スキル：t(383)=0.69，*n.s.*；対象切替：t(383)=1.47，*n.s.*；自己切替：t(383)=0.16，*n.s.*）。

切替タイプ　切替 3 得点を投入変数としてWard法による階層的クラスタ分析を行い，解釈可能性に基き 5 クラスタに分類した。分散分析の結果，切替 3 得点のいずれについてもクラスタの主効果が有意であった（切替メタ・スキル：F(4，381)=131.06，p<.001；対象切替：F(4，381)=210.00，p<.001；自己切替：F(4，381)=150.15，p<.001）。Bonferroni法による多重比較の結果，切替メタ・スキルについてのクラスタ 1 と 3，5，および 3 と 5 の間，自己切替についてのクラスタ 1 と 5 の間を除く全てのクラスタ間に 5 %水準で有意差が見られた。

クラスタ 1 は自己切替のみ高くその他は低い「自己切替優勢」タイプであった。クラスタ 2 は切替 3 得点全てが揃って高い「全高」タイプであった。クラスタ 3 は自己切替の突出した低さが特徴の「自己切替低」タイプであった。クラスタ 4 は切替 3 得点全てが揃って低い「全低」タイプであった。クラスタ 5 は対象切替と自己切替が高い「行動優勢」タイプであった。各タイプの特徴および人数構成を**Figure 3**に示す。人数構成の性による偏りは有意ではなかった（χ^2(4)=7.32，*n.s.*）。

切替タイプ(5)×性(2)による 2 元配置分散分析

自身の関係満足，相手の関係満足，煩雑感，親和欲求を基準変数として，切替タイプ(5)×性(2)の 2 元配置による分散分析を行なった。その結果を**Figure 4**に示す。

自身の満足については，性の主効果のみ有意であり（F(1，375)=7.06，p<.01），女性の方が男

性よりも高かった。切替タイプの主効果（$F(4, 375)=1.86$, *n.s.*），交互作用（$F(4, 375)=1.11$, *n.s.*）は有意ではなかった。

相手の満足については，切替タイプの主効果のみ有意であり（$F(4, 375)=2.69$, $p<.05$），Bonferroni法による多重比較の結果，全高タイプが全低タイプよりも５％水準で有意に高かった。性の主効果（$F(1, 375)=0.29$, *n.s.*），交互作用（$F(4, 375)=0.22$, *n.s.*）は有意ではなかった。

煩雑感については，切替タイプの主効果（$F(4, 375)=1.01$, *n.s.*），性の主効果（$F(1, 375)=0.75$, *n.s.*），交互作用（$F(4, 375)=0.67$, *n.s.*）の全てが有意ではなかった。

親和欲求については，切替タイプの主効果が有意であり（$F(4, 375)=4.05$, $p<.01$），Bonferroni法による多重比較の結果，全高タイプが全低タイプよりも１％水準で有意に高かった。また性の主効果も有意であり（$F(1, 375)=5.30$, $p<.05$），女性の方が男性よりも高かった。交互作用（$F(4, 375)=0.72$, *n.s.*）は有意ではなかった。

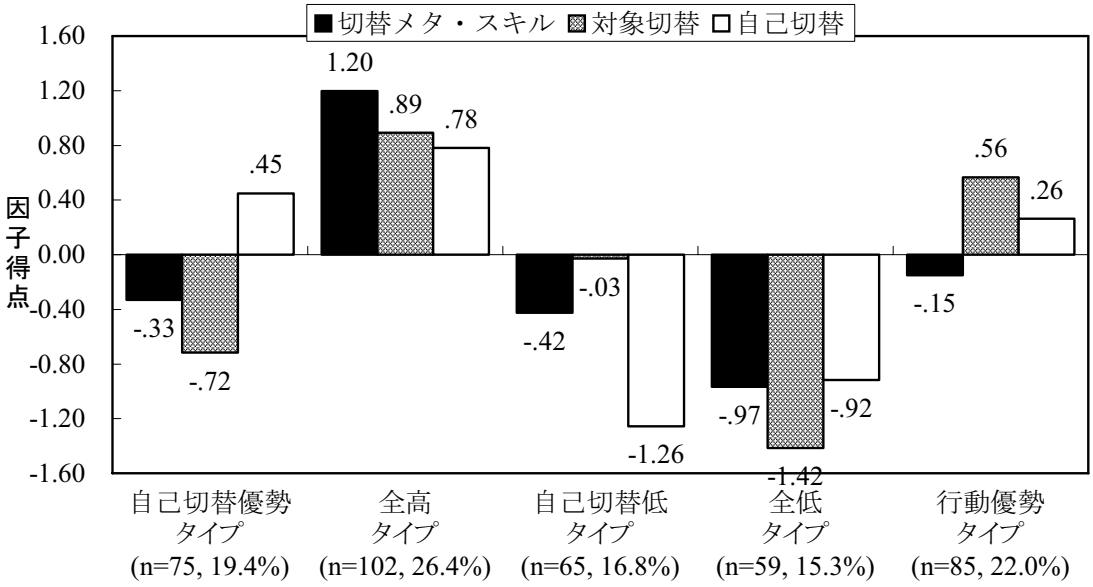


Figure 3　切替タイプ別の特徴

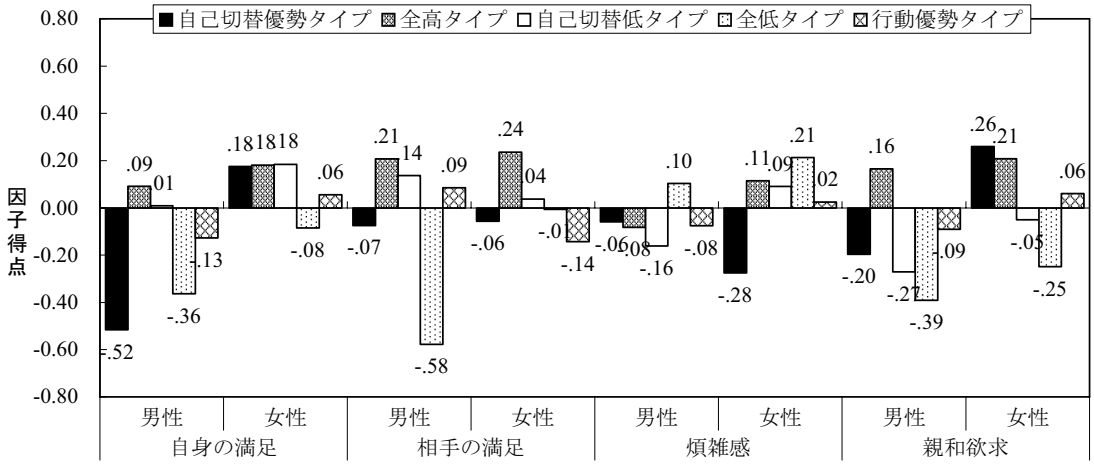


Figure 4　切替タイプ×性別の関係満足，関係志向性

考　察

社会的スキルとしての効果性

前掲Figure 3に表れている通り，切替メタ・スキルが高いのは対象切替・自己切替も高い全高タイプのみであり，切替メタ・スキルが高くて対象切替・自己切替が低い者は極端に少なかった。このことから，切替メタ・スキルが高い者は対象切替行動と自己切替行動の両方を共によく使用している者であることが分かる。そしてこの全高タイプの者が，相手の満足度を強く推定し，親和欲求も強いという結果は，切替メタ・スキルの高さを伴った場合，切替行動は社会的スキルとして効果的に機能することを示している。但し，全高タイプは全体の26.4%である。切替行動を行なう者は7割に上ると報告されており[5]，今回の調査結果においても項目素点で見た切替行動の肯定率（評定4以上の者の割合)は63.5%〜77.2%であったことを考慮すると，この26.4%という比率は決して高いとは言えない。自己切替優勢タイプや行動優勢タイプの者が相当数存在することから明らかなように，対象切替や自己切替の高さは，切替メタ・スキルの高さを伴うとは限らない。そしてそれらのタイプは全高タイプとは異なり，友人の満足の推定，親和動機が高くなかった。この結果から，社会的スキルとして効果的な切替行動をしている者よりも，運用の適切性の欠如から効果を発揮できていない者の方が多いことが分かる。そのために先行研究においては，状況に応じた切替と適応指標との間に負の関連が見られたのだと解釈できる。

自己切替優勢タイプに見られたように，自己切替の高い者の中には，切替メタ・スキルが低く対人切替も用いない自己切替一辺倒の者が相当数存在する。このようなタイプの切替行動を「状況に応じた切替」と見なすことは果たして適当であろうか。彼らは自他にとっての状況の意味や可塑性を考慮せず，ただ所与の状況に自らを合わせようと無闇にもがいており，そして残念なことにその努力は実を結ばない。一方で対象切替一辺倒のパターンは見られなかった。したがって，無闇にもがくだけの，いわば「状況に応じられていない切替」をしている者は対象切替高得点者よりも自己切替高得点者の中により多く含まれていることが示唆される。そのために適応指標との関連を見た先行研究において，対象切替と自己切替とで差が見られた[8),28)]のだと解釈できる。もちろん，自己切替そのものを不適応的な対人行動だとみなすことはできない。なぜなら，自己切替の高さをも伴う全高タイプこそが適応的な状態を伴うからである。質問紙調査と共に半構造化面接を実施した和田（2010）[39)]は，自己切替に関する発話内容は多様であったこと，および，自己切替の多寡と対人ストレスイベント尺度との関連は一様ではない可能性があることを報告している。問題の要点は，行動の種別や多寡ではなく，それらをどう運用しているかにある。

以上の結果から本研究は次のように結論する。青年期の友人関係に広く見られる状況に応じた切替は，社会的スキルとしての効果性を備える，即ち対人関係において効果的に機能し得る行動であるが，適切な用い方をされていないことの方が多い。したがって，行動の多寡ではなく用い方に目を配り，如何に使いこなせるようにするかに焦点した支援・指導が必要である。

また本研究の結果は，青年期の友人関係を捉える上で認知的な情報処理に注目することの必要性を浮き彫りにするものでもあった。現代の大学生においては，近づいたり遠ざかったりを柔軟に繰り返す距離のとり方と，表面的な関係でいつづけることでトラブルを回避することとが混同して認知されやすい[40)]。そうした認知のエラーに対応するためにも，実際の行動や志向性のみで

はなく，そこで行なわれている情報処理に注目して研究していかなければならない。

ところで，相手の満足については切替タイプによる差が見られた一方で，自身の満足についてはタイプ差が見られなかった。この理由については衡平モデル[41]から説明できるであろう。想起した5人の友人それぞれについて，自身の関係満足の素点と，相手の関係満足の推定の素点とを比較すると，全て0.1%水準の有意差があり，その全てにおいて自身の関係満足の方が高かった。即ち多くの回答者は，自身が友人に対して過剰利得状態にあると認知している。この場合，相手の利得を増大させることに動機付けられるため，対人関係を効果的に取り運べる者は自身の満足ではなく相手の満足を上昇させることになる。他方，対人関係を効果的に取り運べない者はそもそも自身の満足も相手の満足も上昇させられない。結果として，対人関係を効果的に取り運べるか否かと関連するのは相手の満足のみで，自身の満足とは関連しなかったのではないか。代替説明としては投資モデル[42]に拠って，切替メタ・スキルも切替行動も共に行為者本人のコストであるため，状況に応じた切替によって関係が良好になったとしても，自身の満足の上昇はコスト増に相殺され，相手の満足のみが上昇すると考えることもできる。今回は直接検証できないため，結論は今後の検討に委ねられる。

親和欲求と殆ど直交する（前掲**Table 4**）煩雑感は，欲求とは独立した純粋な価値観と考えられる。これが切替メタ・スキル，対象切替，自己切替のいずれとも関連しなかった結果は，状況に応じた切替は対人関係についての価値観の如何を問わないことを示唆している。

性差について

切替3得点の高低について性差が見られなかったこと，および，自身の関係満足，相手の関係満足，煩雑感，親和欲求のいずれに対しても切替タイプと性との交互作用が見られなかったことは，状況に応じた切替が，その生起においても機能においても性差を有さないことを示している。同様の結果を報告した浅野（1995）[43]は，近代化の進展により性別規範が相対化しつつあることの影響が現れやすい行動なのではないかと考察している。状況に応じた切替に伴う情報処理過程においては個々の友人間の差異に注意が向けられるため，役割スキーマへのアクセスが減少し，結果として性差が生じにくいのかも知れない。但し，今回の調査対象は男女共に個別的交友が主となる大学生のみであること，また男性の分析対象者数は決して多くなかったことを注記しておく*****。

教育上の課題

本研究の結果から，状況に応じた切替は，行動そのものである切替行動と，切替行動の適切な行使・非行使を決定するための情報処理である切替メタ・スキルとの双方が高いことを条件として，社会的スキルとして効果的に機能することが明らかとなった。また同時に，そのような条件を満たす者は全体の4分の1程度にとどまることが確認された。これらの結果は，青年の7割が用いている対人行動が，彼らの生活の質を向上させ得る手立てであるにも関わらず，必ずしも効果的には用いられていないことを示している。

そこで彼らに対して可能な支援・指導を検討したい。後藤・宮城・大坊（2004）[44]は，一般的な大学生にとっては，自身の社会的スキルや対人関係のスタイルを見直すこと自体にも認知的な

***** 前掲**Table 4**の2元配置分散分析における1セルの人数は平均39名，最少20名であった。

効用があるとしている。また久木山（2005）[45]は，主に行為者側で処理されるスキルに限れば，改善意欲を持つことが実際の改善に繋がることを明らかにしている。本研究で扱った切替メタ・スキル，切替行動も行為者側で処理されるものであるため，自己啓発的トレーニングでの支援が可能であろう。特に切替メタ・スキルで行なう処理は通常自動化していると考えられるため[36]，意識化して省みる機会を提供することは有意義であろう。

但し，上記はあくまで一般的な大学生についての知見である。今回設定した切替メタ・スキルには，視点取得能力やプランニング能力等，認知能力面の発達が必要と考えられる。したがって，それらが充分発達していない個人に対して上記の支援のみ実施した場合，本人の改善努力が実を結ばずに効力感を減じさせてしまう可能性も危惧される。関連する認知能力や基礎スキルを併せて測定し，必要であれば治療的トレーニングへと接続できる形のプログラムないしツールの開発に向けた研究を進めることが望まれる。その取り組みは対象年齢の拡張にも寄与するであろう。

教育現場の現実的なニーズとして介入点の絞り込みを企図する場合，切替メタ・スキルに焦点を限ることは可能かも知れない。なぜならば，今回の結果を見る限り，切替メタ・スキルが高い者はほぼ確実に両方の切替行動をよく使用し，対人関係を円滑に営んでいるのであるから。但し，今回の一時点調査の結果からでは，切替メタ・スキル→切替行動の方向の規定・影響関係の有無は論じられない。切替行動を繰り返す中で切替メタ・スキルが高まっていく学習プロセスも仮定し得る。その場合，自己切替優勢タイプや行動優勢タイプは必ずしも不適応的な類型とは限らず，対人関係の学習過程に現れる過渡期的な類型であるかも知れない。切替メタ・スキルと切替行動とを区別し，その両方に注目した上で継続的に観察・検討する必要があろう。

永田(1989)[46]は「意見や欲求の対立を通じ，子どもが自分の思い通りにならない世界のあることを知り，自分の欲求をコントロールし相手との関係を調整する術を学ぶこと」が友人関係の意義であると述べている。幼児期以前において親的存在や家族との間に展開された所与の関係，受容の享受から，対等他者との間で新たな関係を共に築くことへの質的なジャンプを遂げることが青年期の友人関係には求められる。無条件に受容される関係がサポート資源として重要であるのは論をまたないが，青年期の友人関係においては，その外に踏み出さなければならない。「日頃から人間関係を大事にしている。」との項目への回答に天井効果が強く推認されたこと，および，項目素点で見た切替行動の肯定率が63.5%～77.2%であったことに表れているように，多くの青年はより良い関係を築きたいと願い，工夫・努力を重ねている。その努力を支えるための教育実践が求められる。

本研究の限界と今後の課題

今回の分析は一時点の調査結果に基づくものであり，調査対象者，調査内容も限定的である。一般化可能性，および結果の再現性確認のためには追試拡張を行う必要がある。また，切替メタ・スキル測定のために今回構成したモデル（前掲**Figure 2**）は，高次因子である切替メタ・スキルから各一次因子への非常に強い影響を想定しているが，自他の資源の把握への影響力は想定外に低いものとなった。項目文内容（前掲**Table 1**）に立ち返ると，他の一次因子は純粋に認知処理を問うているのに対して，自他の資源の把握についてはデータベースに貯蔵されている保有情報量に大きく規定されるという差異が生じたようである。したがって，保有情報量をパラメータとして新たに導入する，あるいは項目文表現の再整理を行うことによってモデルを改善する必要

があろう。また今回，自己切替・対象切替の両切替行動の測定には各2項目のみを用いたことが過去の調査結果との対照の便を損ねている。過去の調査と同じ尺度を用いたデータ採取も行うことが望ましい。なお前掲和田（2010）[39]の報告を踏まえれば，状況に応じた切替について青年自身がどのような認知・評価を行っているのかを調べていくことも重要であろう。あわせて今後の課題としたい。

謝　辞

本論文は，日本教育心理学会第51回総会，および日本青年心理学会第17回大会における発表を元に再分析したものです。当日の議論にご参加いただいた皆様に記して御礼申し上げます。本研究を進めるにあたり，滋賀大学教育学部の若松養亮先生に懇切な御指導を賜りました。深く感謝申し上げます。そして調査に御協力いただいた回答者の皆様に，心より御礼申し上げます。

引用文献

［1］和田　実（1990）．青年の対人関係の変容　久世敏雄（編）変貌する社会と青年の心理　福村出版，pp.83-102.

［2］岡田　努（2007）．現代青年の心理学 ―若者の心の虚像と実像―　世界思想社

［3］岡田　努（2010）．青年期の友人関係と自己 ―現代青年の友人認知と自己の発達―　世界思想社

［4］竹内慶至（2009）．友人関係は希薄化しているのか　友枝敏雄（編）現代の高校生は何を考えているのか ―意識調査の計量分析をとおして―　世界思想社

［5］岩田　考（2006）．多元化する自己のコミュニケーション ―動物化とコミュニケーション・サバイバル―　岩田　考・羽淵一代・菊池裕生・苫米地伸（編）若者たちのコミュニケーション・サバイバル―親密さのゆくえ―　恒星社厚生閣，pp.3-16.

［6］大谷宗啓（2007）．高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替 ―心理的ストレス反応との関連にも注目して―　教育心理学研究，**55**，480-490. (Ohtani, M. (2007). Situational changeovers in high school and university students' relations with friends : Correlation with psychological stress response. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **55**, 480-490.)

［7］松尾由美・安藤玲子・坂元　章（2005）．選択的友人関係志向が孤独感，ソーシャル・サポート，自己決定意識に及ぼす影響の検討，日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集，175-176.

［8］大谷宗啓（2005）．高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替　日本青年心理学会第13回大会発表論文集，74-75.

［9］奥田雄一郎（2009）．現代社会における自己の多元化と大学生の時間的展望　日本心理学会第73回大会発表論文集，p.1185.

［10］石井佑可子（2006）．社会的スキル研究の現況と課題 ―「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて―　京都大学大学院教育学研究科紀要，**52**，347-359. (Ishii, Y. (2006). Resent trends and some problems of social skill studies : Toward conceptualization of "Meta-social skill". *Kyoto University Research Studies in Education*, **52**, 347-359.)

［11］Lifton, R. J. (1967). *Boundaries : Psychological Man in Revolution.* London : Deborah Rogers LTD.

［12］Altrocchi, J. (1999). Individual differences in pluralism in self-structure. In J. Rowan, & M.

Cooper (Eds.) *The plural self : Multiplicity in Everyday Life*. London : Sage. pp.168-182.
[13] Bigler, M., Neimeyer, G. J., & Brown, E. (2001). The divided self revisited : Effects of self-concept clarity and self-concept differentiation on psychological adjustment. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **20**, 396-415.
[14] Rafaeli-Mor, E., & Steinberg, J. (2002). Self-complexity and well-being : A review and research synthesis. *Personality and Social Psychology Review*, **6**, 31-58.
[15] Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behaviour. *Journal of Personality and social psychology*, **30**, 526-537.
[16] Clinton, M., & Anderson, L. R. (1999). Social emotional loneliness : Gender differences and relationships with self-monitoring and perceived control. *Journal of Black Psychology*, **25**, 61-77.
[17] Briggs, S. R., Cheek, J. M., & Buss, A. H. (1980). An analysis of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 679-686.
[18] Snyder, M., & Ickes, W. (1985). Personality and social behaviour. In G. Lindzey, & E. Aronson (Eds.) *Handbook of Social Psychology, vol.2, 3rd ed*. New York : Random House. pp.883-947.
[19] Alexander, C. N., & Lauderdale, P. (1977). Situated identities and social influence. *Sociometry* , **40**, 225-233.
[20] Cross, S. E., & Markus, H. R. (1994). Self-schemas, possible selves, and competent performance. *Journal of Educational Psychology*, **86**, 423-438.
[21] Harter, S., Waters, P. L., Whitesell, N. R., & Cobbs, G. (1996). A model of the effects of perceived parent and peer support on adolescent false self behaviour. *Child Development*, **67**, 360-374.
[22] Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
[23] 平井美佳（2006）. 自己－他者間の葛藤解決における調整 ― "個人主義・集団主義" 概念の再検討― 風間書房
[24] 大坊郁夫（2008）. 社会的スキルの階層的概念 対人社会心理学研究, **8**, 1-6. (Daibo, I. (2008). Hierarchical conception of social skills. *Japanese Journal of Interpersonal and Social Psychology*, **8**, 1-6.)
[25] 相川 充（2000）. 人づきあいの技術 ―社会的スキルの心理学― サイエンス社
[26] 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山 巌（1993）. 社会的スキルという概念について ―社会的スキルの生起過程モデルの提唱― 宮崎大学教育学部紀要（社会科学）, **74**, 1-16. (Aikawa, A., Sato, S., Sato, Y., & Takayama, I. (1993). On a concept of social skills : Proposing a process model of social skills. *Memoirs of the Faculty of Education Miyazaki University, Social sciences*, **74**, 1-16.)
[27] 石井佑可子（2007）.「メタ・ソーシャルスキル」測定尺度作成の試み 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 286-297. (Ishii, Y. (2007). Development of "Meta-social skill" measurement. *Kyoto University Research Studies in Education*, **53**, 286-297.)
[28] 松島るみ（2011）. 大学生における状況的・選択的な友人関係について 日本心理学会第75回大会発表論文集, p.176.
[29] 高井範子（2008）. 青年期における人間関係の悩みに関する検討 太成学院大学紀要, **10**, 85-95. (Takai, N. (2008). A study of adolescent worries about interpersonal relationships. *Taisei Gakuin University Bulletin*, **10**, 85-95.)
[30] Hart, D. (1988). The adolescent self-concept in social context. In D. K. Lapsley, & F. C. Power (Eds.) *Self, Ego, Identity : Integrative Approaches*. New York : Springer-Verlag. pp.71-90.
[31] 下斗米淳（2004）. 現代青年における対人ネットワークの拡張可能性について ―準拠集団としての道具的機能評価からの検討― 専修人文論集, **75**, 87-116. (Shimotomai, A. (2004). Possibility of the present

age youth's extending his personal network : Focusing instrumental functions as reference group. Studies in the Humanities: *A Journal of the Senshu University Research Society*, **75**, 87-116.)

［32］吉山尚裕（2002）. 自尊感情と友人とのネットワーク ―女子学生を対象にして― 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, **40**, 11-19. (Yoshiyama, N. (2003). Self-esteem and friendship networks in female college students. *Bulletin of Oita Prefectural College of Arts and Culture*, **40**, 11-19.)

［33］斎藤和志・中村雅彦（1987）. 対人的志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, **34**, 97-109. (Saito, K., & Nakamura, M. (1987). An attempt to construct the interpersonal orientation scale. *Bulletin of the Faculty of Education Nagoya University, Educational Psychology*. **34**, 97-109.)

［34］平松 闊（2003）. パーソナル・ネットワークの分析 ―甲南大学生の場合― 甲南大学紀要（文学編）, **131**, 1-21.

［35］Schermelleh-Engel, K., Moosbrugger, H., & Müller, H. (2003). Evaluating the fit of structural equation models: Tests of significance and descriptive goodness-of-fit measures. *Methods of Psychological Research Online*, **8**, 23-74.

［36］中澤 潤（1996）. 社会的行動における認知的制御の発達 多賀出版

［37］堀 啓造（2005）. 因子分析における因子数決定法 ―平行分析を中心にして― 香川大学經濟論叢, **77**, 545-580. (Hori, K. (2005). Determining the number of factors in exploratory factor analysis. *Kagawa University Economic Review*, **77**, 545-580.)

［38］榎本淳子（2003）. 青年期の友人関係の発達的変化 ―友人関係における活動・感情・欲求と適応― 風間書房

［39］和田広史（2010）. 青年期における友人との付き合い方と対人ストレスとの関連 ―状況に応じた切替に注目して― 目白大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻修士論文

［40］藤井恭子（2001）. 大学生の友人関係における心理的距離のとり方 茨城県立医療大学紀要, **6**, 69-78.

［41］Walster, E., Bershied, E., & Walster, W. (1976). New directions equity research. In L. Berkowitz, & E. Walster (Eds.) *Advances in Experimental Social Psychology, Vol.9*. New York : Academic Press. pp.1-42.

［42］Rusbult, C. E. (1980). Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Jounal of Experimental Social Psychology*, **16**, 172-186.

［43］浅野智彦（1995）. 友人関係における男性と女性 川崎賢一・芳賀 学・小川博司（編）都市青年の意識と行動―若者たちの東京・神戸90's［分析編］ 恒星社厚生閣, pp.53-66.

［44］後藤 学・宮城速水・大坊郁夫（2004）. 社会的スキル・トレーニングの効果性に関する検討 ―得点変化のパターンにみる参加者クラスタリングの試み― 電子情報通信学会技術研究報告, **104**, 7-12. (Goto, M., Miyagi, H., & Daibo, I. (2004). The effectiveness of social skills training : The cluster analysis about changes of participants' rating score. *Information and Communication Engineers*, **104**, 7-12.)

［45］久木山健一（2005）. 青年期の社会的スキル改善意欲に関する検討 発達心理学研究, **16**, 59-71. (Kukiyama, K. (2005). A study of motivation to develop social skill in adolescence. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **16**, 59-71.)

［46］永田良昭（1989）. 仲間関係の変貌 教育心理, **37**, 180-183.